

『逢瀬の迷子』

著:水戸 泉

ill: サマミヤアカザ

ホテルの一室で再会した千章は、五年前に別れた時と比べてあまり変わっていなかった。禾沙真の所にいた一年の間に少し背が伸びたが、あ後はそれほど成長しなかったらしい。むしろ、あの頃よりも痩せて小さくなったように見えた。顔色も芳(かんば)しくない。

愛らしい顔立ちは変わっていないが、この五年間、決して楽な暮らしをしてこなかったのであろうことは容易に見て取れた。

ソファに深く腰掛けた禾沙真の前で、千章はまだ呆然と立ち尽くしている。禾沙真は態(わざ)とらしく微笑んで、促(うなが)した。

「座ったらどうだ」

「あ……は、い……」

禾沙真に言われて千章は、禾沙真の対面の席へ座ろうとした。が、すぐに禾沙真がそれを訂正させる。

「違う」

と、禾沙真は自分の座っているソファを軽く叩いた。

「こっちだ」

禾沙真が指し示したのは、自分の隣だった。一瞬、千章の目に複雑そうな色が浮かぶ。その反応は、禾沙真を愉しませた。

それでも千章が逆らうはずもなく。すぐにおずおずと、禾沙真の隣へと移動し、浅く腰掛ける。

「何か飲むか」

「い、いえ……」

禾沙真に聞かれて、千章はふるりと首を振った。少し辿(たど)々(たど)しいしゃべり方も、五年前と変わらない。

禾沙真は一人で水割りのグラスを空けながら、おもむろに千章に言った。

「仕事、する気があって来たんだよな？」

「え……あ……」

どうにも煮え切らない返事を、千章はした。

何か深く戸惑っている様子だったが、そんな演技に騙(だま)されてやるつもりなど、禾沙真には毛頭ない。

千章が何も知らずにここへ来たなどとは、到底考えられない。そもそも禾沙真の事務所に、タレントとして応募してきたのは千章だ。その会社の社長の名を、知らないはずがないだろうと禾沙真は思った。社名にだって禾沙真の苗(みょう)字(じ)である『守谷』が冠(かん)されている。

つまり千章は、何もかもを含んだ上でここへやってきたのだろうと禾沙真は結論していた。

数多く送られてくる応募書類の中に、千章の名前と写真を見つけた時、禾沙真は息

が止まりそうなほど驚いた。なぜ今頃、という想いが強く湧(わ)き起こった。

禾沙真は千章を、忘れられなかった。

別れてからの五年間、ただの一日も記憶から消せなかった。

それは怒りであり、懐かしさでもあり、一言では表せない感情が入り混じった複雑なものだ。

それでも千章を捜そうとはしなかったのは、禾沙真の意地だった。自ら去って行った千章を追うことは、禾沙真自身のプライドが許さなかった。

千章は、雪也ではないのだ。追う必要などない。追ってはいけないと、禾沙真は自分に言い聞かせていた。

その籬(たが)を、外してしまったのは他にもない千章だ。

千章にもう一度会えるという可能性が。

千章が自分から手元に戻ってきたという事実が、禾沙真の籬を外させた。

千章がどういうつもりで応募してきたのかなど、禾沙真には聞くつもりはなかった。まさか、本当にタレントになりたいなどとは思ってはいないだろう。千章はそういう性格ではなかった。いつも禾沙真の背中に隠れたがるような、控えめな性格だった。

その千章が、五年の歳月を経て再び自分の前に現れた理由など、禾沙真には一つしか考えられない。

金目当てだろう、と。

禾沙真は、自分の事務所の『売り物』に手をつけたことはない。

政治家や有力者に幹(あつ)旋(せん)したことはあるが、自分で抱きたいと思ったことは一度もなかった。相変わらず禾沙真は、利用できそうな女としか寝ない。そもそも女が嫌いだから、本当はそれさえも鬱(うっ)陶(とう)しいくらいだった。

なのに、千章のことは抱きたかった。男の躰に特別な興味を抱いているわけでもないのに、千章のことだけは忘れられなかった。

五年前、千章を抱けなかったことを禾沙真は悔やんではない。あの時、千章はまだ子供だった。

禾沙真は幼児性愛者や未成年を性の対象とする者を、心底憎んでいる。だから、抱けなかった。

けれど、今は違う。千章はもう、二十歳だ。

金で抱けるのなら、抱いてやってもいい。

そんな残酷な気持ちで、禾沙真は千章をここへ呼んだ。

千章は禾沙真の隣で、じっと身を固くしている。何かを言いたげに、時折禾沙真のほうを見る。

そんな千章に、禾沙真は平(へい)坦(たん)な声で聞いた。

「先にシャワーを浴びるか」

「……え……」

何を言われたのか理解できない、という顔を、千章はした。その顔を見て、禾沙真は気が変わった。

シャワーは後で浴びさせればいい、と。

禾沙真は立ち上がり、千章の腕を掴んで引っ張った。無言で連れられて千章は、おろおろと困った顔で禾沙真を見上げる。

「あ、あの……」

千章が連れてこられたのは、隣室のベッドルームだった。そこまで連れてこられてもまだ、千章は戸惑うことをやめない。

流石(さすが)に苛(いら)立(だ)ちを覚えて、禾沙真は一言、冷たく告げた。

「脱げ」

千章の目が、見開かれる。

反射的に後(あと)退(じさ)ろうとするのを、禾沙真はまた腕を掴んで止める。

「まさか、まともな仕事だとでも思って来たのか？」

今頃になってようやく、千章は禾沙真の言う『意味』を理解したようだった。もしも演技でないのだとしたら、あまりにも遅すぎる自覚だった。

「ちが、ちがう、んです……！」

必死になって否定する千章を、何が違うのかと禾沙真はせせら笑う。

五年の間に、禾沙真は変わった。自分の闇を呑みこむのと同時に、自分の闇に呑みこまれていた。

いくら雪也に似ていたって、千章は雪也ではない。

抱いたところで、何も問題などない。

抱きたかったのだ。

本当は、ずっと、千章のことを。

怯える軀を掻き抱いて、柔らかなベッドへ押しつける。悲鳴を上げることもできず、千章は懸命に、何かを言おうとしている。

「ちが、う、お、おれ、ちが……っんうっ！」

顎(あご)を押さえられ、唇を塞(ふさ)がれて、千章の叫びは中断された。

「ん……っ……く……」

なんとか口づけから逃れようとする千章の唇を、禾沙真は容(よう)赦(しゃ)なく貪(むさぼ)った。

キスならば一度だけした。

否、一度だけ、された。千章のほうからだ。掠る程度に触れて離れたあのキスを、禾沙真は覚えている。

忘れたことなど、一夜もない。

唇を離すのと同時に、禾沙真はまた残酷なことを千章に言った。

「商売をしにきたんだろう」

千章の眸が、驚(きょう)愕(がく)と恐怖に震えている。

本文 p51～56 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>